

---

# **魔法少女リリカルなのは ~転生者によるIFな物語~**

黒い鳥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは（～転生者によるエフな物語～）

### 【NNコード】

N4580N

### 【作者名】

黒い鳥

### 【あらすじ】

【魔法少女リリカルなのは（～転生者による狂い物語～）】のエフの世界での話……だつたが、何やら前作の世界と繋がっている様子。そしてそんな世界に転生した原作非介入派である少女の前に現れた、最高の魔導師。

その二人の話。

## 一話 彼女は転生者（前書き）

何となく思いついたので投稿しました。  
たんに思いつき小説なため、超不定期更新になります。  
ある意味、続編ですね。

## 一話 彼女は転生者

腰まで届くであろう焦げ茶色の髪を持つ少女、浮鳴遙は転生者である。

よくあるテンプレな方法で死に、テンプレに能力を貰い、テンプレにリリカルな世界に転生してきた元高校生の少女。現在は小学三年生。

「はあ……」

一つに纏められたボニー・テイルが溜息と共に揺れる。

前世と同じ容姿で生まれ、前世と同じ両親から生まれたが、生まれた世界は前世とは違う。

リリカルでマジカルな世界なのだ。

そりやあ、テレビの向こう側で見ている分には楽しめたが、実の世界となると話が変わってくる。

もしかしたらあつたりと死んでしまうかもしれない世界なのだ。

実のところ、彼女の隣の席の生徒は、主人公高町なのはである。全転生者が欲したであろう席を、彼女は手に入れたのである。しかし彼女からすればまったく嬉しくないこと。

原作非介入派である彼女からして見れば、あまりにも嫌な席である。

ちらり、と高町なのはを見る。

すると目が合い、笑顔を向けてきた。  
一応、こちらも笑顔を向ける。

内心、恐怖しながら。

そもそも遙は高町なのはと言う存在に怯えているのだ。  
何故、あれほどまでに裏無く人間に優しい心で接する事ができるのか。

人間、人を救おうとする気持ちがある場合、絶対に自身の利益を考えるものだ。

しかし彼女は九歳の癖して自身の利益など考えることなく、助けを求めてきた少年のために、友達となる少女のために、世界のために動いたのだ。

「…………

そんな美しか存在しないような少女を、遙は人間とは思えないのだ。  
九歳児と言う純粋なお年頃だから？ 嘘だ。九歳児ならもつと我侷を言つている時期だ。

「……はあ」

他人のために自己犠牲をする。

それは衛宮士郎と同じようなものだ。しかも才能がある分、なお性質が悪い。

「まあ、私が関わらないところでマジカルしてね」

息しか吐いていないようなほどの音量で呟いた。

屋上で一人、弁当を食べていたといふ。

別に友達が居ないと言つわけではなく、食事のときは静かに食べた  
いのだ。

だが、その静寂な時間に 独り（・・）の少年が現れた。

「やつほー。転生者」

翡翠色の髪と眠たげな真紅の半眼を持つ少年が、彼女の前に訪れた  
のだ。

## 一話 彼女は転生者（後書き）

主人公は浮鳴遙さん。

十話も無いと思います。多分。

## 一話 彼は魔導師

さて、遙の容姿を語つてみよう。  
まず原作主人公達に劣らないほどの美少女である。前世ではかなりモテたが、本人は興味なかつたので『年齢』=『彼氏居ない歴』に彼女は当てはまる。

もつとも『恋愛感情など一時の気の迷いによる精神的な病の一種に過ぎない』と言うモットーを掲げる彼女なのだから、彼氏が出来た  
――なんて喜んでいる友人を見て思わず苦笑してしまうほどだ。

次に、髪。

焦げ茶色の、腰まで届く綺麗な髪をポニーテイルに纏めている。  
次に、瞳。

大きく理知的な真紅の瞳である。

そんな彼女の前に

「…………」

真紅の瞳を持つ少年が現れた。

顔立ちは整っている方。イケメンとまではいかないが、カッコいい部類に入る顔である。

しかし、思わず目についてしまうのは、その瞳。  
自分と同じ真紅の瞳だ。

その瞳からは卑しい感情や見下したようなモノは感じられず、ただ観察しているかのような目である。

「…………」

しかも、彼女の事を転生者と言つてきたのだ。  
つまり彼は転生者の部類に入るのであろう。それはわかる。  
だが、こいつ言った唐突な接触に、彼女はどうすれば良いのか頭を悩  
ませていた。

「……それで、貴方は何者かしら？」

転生者と呼んできた以上、誤魔化しは効かないであろう。  
多分、彼は転生者などを知る事ができる能力持ちだ。  
そう推察したと同時に、彼に質問した。

「オレ？ オレはお前の隣のクラスのかなたゆくえ彼方行方かれがたゆくえだが」

試すような笑みを浮べながら、あっさりと名前を明かしてきた少年  
彼方行方。

「私も自己紹介したほうが良いかしら？」

「どちらでも」

すでに知られている。

「浮鳴遙よ。よろしくね」「ああ。よろしく」

余裕そうな聲音。  
余裕そうな表情。  
接觸してきた意図は?  
何故こんな時間に?

そう言つた事を冷静に考えていく。

あまり得意ではない魔法。その部類に入る並列思考を全力で使い、相手に気づかれない短い時間で考える。

「ふむ。別にそこまで考える必要は無いぜ」

「……何が？」

「不得意なマルチタスクを使って今まで考えなくて良い、って意味だよ」

「」

一瞬、世界が止まった。

そう錯覚してしまったほどの驚愕を彼女は感じた。

絶句なんて生易しいものではない。多分、脳味噌の動きが止まつたのである。

そう考えてしまつほどの言葉であった。

「……ん？」

ふと、行方が疑問を感じたような声を出した。  
そして納得したかのような聲音で、

「ああ。能力無効化系能力者か」

「まあね」

彼女のスキルによつて能力を無力化した。

その瞬間、彼は確認をしてきた。

つまり今まで知る事ができていたが、能力を無力化された瞬間に知る事ができなくなつた。

それだけわかれば、すぐに理解できた。

「もしかして、彼方君の能力って解析系?」

「そうだぜ。よくわかつたな」

「…………」

不信感が高まる。

能力を封じられたのに、余裕そうな表情と声音は変わらない。  
だから、質問を変えてみた。

「……魔法の方にも自身があるの?」

「そうだな。能力も強力なものだが、魔法も原作の主人公達以上だ

ぜ」

「……どのくらい?」  
スペルマスター

「他称、最高の魔導師」

はつきし言おう。

彼女のスキルの無効化スキルでは、魔法までは封じられない。  
故に、魔法の強度を聞いてみた。そして、後悔した。

「それで、用件は?」

「ああ。用件は」

「……空間移動?」  
テレポート

行方がそう言つたと同時に、結界を展開した。  
苦々しい表情をしたと同時に、遙は 消えた。

結界を閉じ、溜息を吐いた。

「……誤解されたか。抹消されると思われたか?」

周りと隔離するために展開した結界により、逆に警戒されたか。  
そつ行方は考え、

「ま、どりでも良いか」

そつ言つて彼は教室へと戻つていつた。

「思わず逃げてきちゃつたけど……もつ少し居た方が良かつたかし  
ら」

軽率な行動だつたか、そう考えたが……相手の手札が分からぬ以上、逃げてきてよかつたのかもしない。こちらはまだ内容 相手の目的を聞いていない状態で逃げてきたのだ。

なら、良い感情は抱かれないのであろうが、だからと言つて敵として見られないはずだ。

そつ考え、新しい手札を作ることにした。

「午後からの授業は適当に参加するしかないか……」

何氣に小学校生活を楽しく送つてゐる彼女からして見れば、この出会いは面倒臭いことであつた。

一話 彼は魔導師（後書き）

一話一話が短い？まあ、それは見逃してください。

## 二話 転生者は疲労する

行方と出会ってから三ヶ月。

あれから彼方行方は何もしてこなかつた。直接的にも間接的にも。普通に隣のクラスなので見かけるし、すれ違つたりするが、完全に他人面である。

もしかしてあんな時間、本当は無かつたのでは？ と考えてしまつほどだつた。

用意しておいた切り札が無駄になつた感じだ。

しかし、彼が接触してきたおかげで自分がことん魔法に対し弱いと言つことを教えられた。

我流であるが、少しそっち方面に鍛えてみよつか？ そう考えることが出来たことには感謝する。

「ま、あの時、逃げたのは失敗だつたみたいだけど……」

転生者を排除するのが彼の目的だつた場合、すでに遙は殺されているはずなのだ。

普通な生活を送つてゐる遙には隙が多く、いつでも殺せたはずだ。

だが、行方は先程言つたとおり何もしてこない。

つまり、行方には暴力的な目的があつたわけではないのだ。

普通に用件を聞けばよかつたかしら？ と少し後悔する。

「……よく考えれば、彼以外にも転生者はこの学校に居る可能性があるのよね」

一度調べた方が良いな、と思い新たな手札を作ることにした。

「……ふむ」

一方、行方の方はと云ひ、遙以上の悩みの種が出来てしまい、悩んでいた。

彼の悩みの種となるものはもちろん、転生者である。

その転生者は一ヶ月ほど前に地球に現れた。

それだけなら別に脳を使うほどでもなかつた。単なる転生者程度なら、何が起こるかと解決できるからである。それだけの手札を彼は持つてゐるからである。

逆に言つと、持つていない手札の範囲で起きたことは非常に弱いのだが。

事実、遙を見つけたときには彼は一年ほどかけて彼女に對しての手札を作り、そして接觸したのだ。

あまりにも酷い反則技さにびくすすれば良いのか、と言ひ思考をしていたのだ。

「あ～あ。また酷い反則野郎チートが出てきちゃつたよ」

自室のイスに座り、背もたれに寄つかかりながら溜息を吐く。

原作開始まであと一年と少し。

遙と同じく原作非介入派である彼は、彼女と接觸して同盟を組もうとしたのだが……用件を伝える前に逃げられてしまつた。

その放課後に出会った転生者やら、一ヶ月ほど前に現れた転生者やらで彼女と接触する時間がなくなってしまったのだ。いや、しつこく接するのもどうかと思い、時間を置いた、と言つ点もあるのだが。

しつこく接すれば、ストーカー扱いされるかも知れないし。  
そんな適当なことを考えた後に作業に戻る。

「さてと……依頼されたものぐらにはしつかりと造らなくちゃな」

今、彼が作っているのは一ヶ月ほど前に現れた転生者に頼まれた物品名は、『零時迷子』。

本来の『零時迷子』は“存在の力”と言うものを毎晩午前零時にその宿主が消耗した“存在の力”を元に戻し回復させる一種の永久機関である。

しかしこの行方作の『零時迷子』は違い、“存在の力”的に魔力を回復させる物である。

宿主の魔力情報を解析し、毎晩午前零時に『零時迷子』から同じ波長の魔力を增幅させる、と言う仕組みである。

「まったく……何をやつてんだか。オレは」

原作に介入しないと決めときながら、原作以外で起ころる事柄に対しては首を突っ込む。

原作でなければ安全？ んなわけない。

結局のところ、彼はお人よしでもない。

ただ単に流れやすい人間なのである。

情に流されるのならまだ良いが、その場で流れてしまつ。

そんな自分に溜息を吐いた後、作業に戻つた。

「まあ原作には絶対に介入しないけどな」

行方が幼い頃にこちらに転移してきたときに養子に向かい入れてくれた男性のことを考える。

彼のためにも迷惑になるような行動は控えよつと考えたのだ。

それでも転生者と関わってしまうのは、転生者だからかもしれないが。

「……ふああ。眠い。寝よ

作業を中断し、ベッドに身体を預ける。

子供の身体であれば疲労が溜まり、眠らずにはいられない。

平行世界の彼とは違い、まだ人間らしい日常を彼は送っていた。

翌日。

腕輪型のデバイスを身に付けながら学校に登校した。

「まったく……放課後も他の世界に行つて素材集めしに行かなくちゃいけないぜ」

『お疲れ様です。マスター』

右腕に付けた彼のデバイス、ドラウプニル 略称ニールが行方をろう。

デバイスを持ち歩いている理由は簡単で、ただ単に話し相手が欲しかったからである。

かなりの人間不信者である彼はと言つて、信用できる人間が少ないため、話し相手が少ないのだ。

ありとあらゆるモノを分析できる彼の瞳スキル構成解析コットドノウズにより、相手の思考や感情なども読めてしまう。この能力により、相手の能力や魔力の動きなども見ることが出来る。故に、遙が魔法を苦手としていた事を見抜いたのだ。魔力の動きが鈍かつたから、苦手だと理解できたのだ。

「あ、行方先輩。おはようございます」

「ん？」

後ろから挨拶されたので振り向く。

そこには

「ああ。お前か」

三ヶ月前に彼の前に現れた転生者が居た。

「なんか、お前に先輩だ何て言われるの……奇妙な感じなんだが」「いやいや、あっちの世界でも僕は貴方より後に転生してきましたし」

クックク、と特徴的な笑い方をする転生者を見つめ溜息を吐く。

「もつとも、あっちの世界とは少し性格が変わつていふだけどな」

「まあ、色々あつたんですよ。色々」

今日も遙は屋上の隅で一人、弁当を突いていた。

最近、隣の某悪魔さんが一緒に食べない？と誘つてきているが、

「私、独りで食べる方が好きなの。ごめんなさいね」

と言つて諦めてもらつてしているのだ。

内心、どこの厨一病だよおおおおおおーー……とか叫びながら屋上に向かつている。

それが彼女の日常であつた。

そんな彼女の日常に、また影が差した。

「やつほー。転生者さん」

ついに来たか、と思い顔を上げると　そこには、彼方ではなく少女が立つていた。

どこか皮肉を感じさせないシニカルな笑みを浮べている、長い銀髪に翡翠の瞳を持つ美少女。

背からして一年生だと思われる。

「…………

予想外な自体が発生した。

そんなふうに頭が混乱している中、彼女は自己紹介を始めた。

「初めてまして、僕は

「



### 二話 転生者は疲労する（後書き）

姿や見た目、口調も多少変わってしまいましたが、彼女が登場しました！

……え？ 誰だつて？ まあ一人称でわかるんでは無いでしょうか？

それではこの辺で。

現在までに出てきた転生者：四人

## 四話 彼方より来た転生者

「僕は、キール・ローレライって名前なんだ。よろしく、浮鳴先輩」

リアル僕つ娘が現れた。

「…………」

いや、そんなことはどうでも良い。

単に個性的な少女が目の前に現れただけだ。

問題なのは、個性ではない。<sup>ボクチコ</sup>問題なのは、目の前に現れた転生者である。

明らかに転生者であろう彼女は……あれ？ もしかして男の子？  
え？ もしかして髪が長く、さらには容姿が美少女な少年だつたりする？

下の服装を見てみると、スカートの下にズボンが見える。  
スペツツ代わりとも言えなくも無いが、彼ノ彼女の一人称を聞く限り、男物のパンツを隠すためのズボンとしか思えない。  
いや、だつたら何故スカートを穿くんだ？

「…………」

何てかなり失礼なことを考へてゐる遙であつたが、キールの方はただ苦笑するだけである。

「やれやれ、前世から男子か女子か、何て困惑させることがよくあつたが、せつかくの美少女姿になにに困惑している表情を見ると、

さすがに僕でも少し傷付くよ

「あ、ごめんなさい」

思考放棄。

素直に謝り、今度こそ（多分）彼女への対策を考える。

転生者 それだけでも脳を働かせなくてはいけない存在だ。

敵味方関係なく、転生者と言つ存在自体がイレギュラーであるから考えなくてはいけない。

しかしキールの方はと言つと、その真剣な表情を浮かばせている遙を見て、

「別に警戒する事はないよ。行方先輩もそうだけど、僕達の役目はもう終わっている。だから、僕達は原作に関する全ての事象について警戒しないでくれ」

「……どう言う意味かしら？」

「そのままの意味だよ。原作介入を狙い他の転生者を抹消しようとする愚かな転生者達とは違う、と言つ意味だよ。だから君に害意を「える気も無いし、悪影響を「える訳でもない」

「……」  
「……」  
「……」

事実口異  
ライアーカット

ここで、キールが発言した内容がどれだけ真実かどうかを見抜くために彼女は能力<sup>スキル</sup>を使った。内容は、虚偽の部分だけ頭から無くす、と言つ能力である。

「……」

そしてスキルの結果 全てが眞実である事がわかった。  
故に、彼女は怪訝な表情をさせた。

『行方先輩もそうだけど、僕達の役目はもう終わっている』

「……出番つて、どういつ意味かしら？ まだ原作は始まつていないのに」

「簡単な話だよ。僕達は…………」

唐突に言葉を止めてしまったキールに対し、またもや怪訝な表情をしてしまう。

キールの方も、驚いた表情をしながら喉に手を当てている。

「……ふむ。悪いが言えないみたいだ」

「そう」

スキルで確かめているため、言葉に偽りが無い事を知る事ができた。

「それで、貴方達の目的は？」

「何。簡単な話さ」

クッククック、と喉を鳴らすような笑いをした後、

「同盟を組みたいのさ。現在は僕と行方先輩だけだけど」

「…………同盟？」

「何の同盟かしら？ そもそも、同盟なんて組む必要なんであるのかしら？」

「まず、転生者に関しての情報が得られる

「「」みんなさい。私、転生者とかにも興味ないの。平和に暮らせれば」

そう、転生者とか何だと最近は彼女の周りが忙しいが、結局のところ、彼女は平和に暮らしたいのだ。だから原作に関わるつもりも無いし、転生者にも関わるつもりも無い。

「そう? だけど、その平和を手に入れんには A, S を乗り越えなくちゃいけないよ?」

「…… A, S」

「そう。蒐集が行われる時期だ」

「何で私に関係あるのかしら? 自慢じゃないけど、私はBランクも魔力値が無いわ」

「確かに、自慢じゃないね」

クッククク、と喉を鳴らすような笑いをする。  
皮肉や嘲笑、見下しの類では無いことはスキルを使わなくてもわかる。

「違うよ。正直言つて、転生者からしてみれば、ウォルケンリッターなんて田じやないよ。警戒すべき存在は、僕達と同じ転生者だ」

「A, S で転生者達が暴走するの?」

「ああ? そこまでは言わないよ」

「……」

詐欺師と話している感覚に陥る。  
ビームまでが本当で、ビームまでが嘘か。

「え?」

いつの間にか、ライアーカット事実口異が使えなくなつていた。

何故？ どうして？

そつ思考を巡らせるが、答えは出でこない。

「貴方、何をしたの？」

「ちょっとした能力で君の能力を封じたのさ」

「…………」

能力を無効化する能力を発動してみるが、現状は変わらない。何が起こっているか理解できない。

「それで、同盟に入るのかい？」

「…………その同盟の目的は何なのかしら？」

「簡単だよ。原作介入を求めるない転生者同士で助け合ひ同盟だよ」

「…………本当にそれだけかしら？」

「…………」

ただ笑みを浮べるだけでキールは何も言わなかつた。

「…………却下するわ」

「そうかい。それじゃ行方先輩にも伝えておくよ」

「ええ。お願ひね」

そう言つてキールは去つていつた。

「…………戯言ね」

弁当箱を片付け、教室へ戻つていつた。

そして一年後の無印で、同盟を組んでおかなかつた事に後悔する事になる。

「はあ……はあ……」

偶々手に入れてしまつたジュエルシードが、こんなことになるとほ……。

そう思い、溜息を吐きやうになる。  
だからと言つて状況は変わらない。

「あら？ もうくばつたの？」

突如、田の前に紫色交じりの銀髪の少女が現れた。  
へばつた……それは当たり前だ。

「何よこの異空間……さつさと解除しなさいよー！」

夜の街道が永遠と続いている。

その終わらぬ道を、遙はずつと彷徨つていたのだ。  
目の前の少女によつて作られた異空間の中を。

「『じめんなさいね。だけど、これも必要な事なの』

優しい笑みを浮べながら、赤い瞳を鈍く光らせた。

遙を異空間に閉じた相手は笑いながら、自身のウサ耳をピヨピヨ  
こと動かした。



## 四話 彼方より来た転生者（後書き）

作者です。活動報告にも書きましたが、何故自分のところには感想が来ないのだろうか？ そう悩み続けている毎日です。

レベルが低いのか？ それとも面倒臭いのか？

色々と悩ましながら毎日を過ごしています。前作でもこんな話をしました一日ぐらしは来たりしましたが、すぐに感想が来なくなりました。

良い部分とか悪い部分とか、指摘すら来ないので何にもわからなくて……。

主観的と客観的の違いですね。

何故来ないのだろう……。

作者が何か悪いのだろうか……。

……マイナス思考ですみません。  
ネガティブ

それではこの辺で。

## 五話 彼女の原作直前

この一年間、平和な日々が続いた。

魔導師だと転生者だと、そんな単語が出てきそうにない日々を送った。

だけど、それでも我流であるが魔法を鍛えてみている。

自身が魔法に対しても弱すぎる、と言うことを彼女は自覚している。故に少しでも対策を作れるよう鍛えてみているのだが……そこまで成果は無かった。

もっとも、CランクからBランクには上がったが。

「……んつ！」

腕を天に向かって伸ばし、背を伸ばす。

背中からパキパキと心地の良い音が鳴る。

朝から寝相を悪くして寝ていたことにより背中の状態に奇妙な感覚を感じていたのだ。

九歳で背骨が悪くなる、とか絶望的なことにはならないよう寝る前に気をつけようと誓つたのだ。

そんなことを誓つてゐるうちに、チラホラと一年生が見えてきた。初々しく、少しソワソワしている。

「今年は何組になるのかしらねえ」

今日は私立聖祥大学付属小学校の入学式である。つまり遙の小学三年生生活の始まりの日もある。

彼女が原作の舞台である聖祥に入学した理由は単純で、大学まで続いているからである。

この海鳴市には大学が聖祥以外存在せず、かなり遠いところにある。故に、エスカレーター式の学校に入学してしまったのだ。学力は必要だが。

「ええっと……うん。またなのはちゃん達と同じクラスか」

三年間同じクラスである主人公の名前を見つけ、溜息を吐く。依然、転生者である彼方行方は同じクラスにならない。アチラで何か細工しているとしか思えない。

自身もそう言った能力があればよかつた、と悔いながらも自身の教室へ向かう。

席は名前順なので、相島結城君あいじま ゆうきと中端黒兎君なかばし こくとにはさまれる事になる。隣の席の子が月村である時点で、彼女は諦めていた。

そして ホームルーム HR の時間。

いつもなら自己紹介の時間なのだが、今日は少し違った。

「みなさん。今日は新しいお友達の紹介しますね」

その担任の言葉に浮鳴はギョッとした。

原作開始直前で 転入生が現れるなんて、転生者としか考えられなかつた。

そして遙の予想は的中。

銀髪銀目<sup>シルバーヘア・シルバーアイ</sup>のイケメンな少年が入ってきた。おかしなことに、まだ小学三年生と言う幼い年頃なのに、イケメンと言つ造形がすでに完成している。

そんな少年が微笑んだ瞬間

「初めまして。今日転入してきた中島貴樹です。よろしく

なかじまたかき

クラス中の女子が頬を紅潮させた。

『ニコ・ボ』『撫でボ』

恋愛系洗脳能力。

微笑んでも相手の頭を撫でても異性から高い好意を得られる、と言う能力。

これが効かないのは、すでに異性に好意を抱いている者か、もしくは転生者か。

転生者である遙には通じず、彼女は少し引いていた。  
男子勢の幾割が嫉妬の対象として見ていた。多分、好きであった少女が頬を紅潮させたことに気づいたのだ。

「やつてらんねー」

思わず口を悪くしてまで呟いてしまった。

昼休み。

いつも昼食の時に使っている屋上は中島と女子達で占領されてしまつてるので、遙は珍しく中庭で食事する事にした。  
何故、彼女が中庭にあまり行かないと言うと……

「……ん？ 珍しいな。お前が来るなんて」

「もしかしたら初めてなんじゃない？ 彼女が来るのは」

彼方行方とキール・ローレライが居るからだ。

キールの噂は聞いており、外国人だが日本語ペラペラ。しかも社交的な性格でクラスの中心のようだ。先生からも優等生と認められている彼女だが、よく一年上の彼方行方とよく話している姿を見かけるとか。それも中庭でよく昼食を一緒に取っている姿を見かけているとか。

人気はあるが、そこに恋愛が絡んでくることは無いらしい。遙は計算しながらの振る舞いなのでは？ と考えているが、まあ恋愛発展にならないような振る舞い以外は彼女自身の性格が起因しているのであろう、と結論付けていた。

#### 閑話休題。

「一緒に良いかしら？」  
「構わないが」

一人に近寄り、彼女は座つて弁当を広げた。

「今日、中島貴樹つて転生者が現れたんだけど、貴方達は把握していました？」

「…………」「

その言葉に、少し驚いたような表情をした。  
しかし一人とも種類の違う驚き方をしている。  
行方の方は中島貴樹と言つ名前に。キールの方は転生者と言つ言葉に。

「彼、『ニコボ』や『撫でボ』を持っていたけど……」

「え？ それは本当かい？」

「ああ。 それは知っていた」

二人の反応は先程から違い、キールの方は知らず、行方の方は知っていたようだ。

そのことに遙は違和感を感じた。

「……先輩。 もしかしてすでに中島と接触していたのかい？」

「まあね。 ちょっとした不可侵条約を張つたんだが……まさか転入していくとは思わなかつた」

ライアーカツト  
事実口異を使用しながら話を聞いているので、彼等が嘘を吐いていないことがわかる。

「だけど、彼は『ニコボ』と『撫でボ』なんて持つていただろうか

「いや、 は持つていなかつた。 の不安要素が関係している

んだと思ひ

「なるほどね」

ところどころ、彼等の会話が聞こえなかつた部分があつた。  
声が小さかつたとかそんなものではなく、何かによつて知覚することを遮られたと感じであつた。

遙にはこの現象に身に覚えがあり、前回のキールも彼女の前では話せなかつた内容があつた。  
それと同じだわうと結論付け、質問しなかつた。

「……どうやら貴方達、彼のことをよく知つてゐるようね

「まあね。 からの付き合いだし」

「もつとも、 もそじまでの付き合いは無かつたがな」

聞こえない部分があつたりと、 奇妙な感覚に陥る。

「……一つだけ質問」

「ん？」

「彼は貴方達の同盟に……」

「いや、 入っていない。 思いつきり原作介入する気だしな」

「そう」

それで会話を終了させた。

昼休みも後半に入ったので、 さつわと弁当の中身を片付ける事にした。

**五話 彼女の原作直前（後書き）**

今回登場した転生者：五人

## 六話 彼の原作直前……彼女の能力（前書き）

暴力的な戦いはあまりないだろうけど、能力同士の戦いはありそうになつてきました。暴力はいけないもんねっ！

## 六話 彼の原作直前……彼女の能力

翡翠の髪を持つ少年、行方は考える。

昼間に転生者の一人である遙に聞いた、中島貴樹が転入してきたことに関するだ。

中島貴樹に関してはすでに確認済みで、彼の能力も把握している。

名前：中島貴樹

魔力：SSS

能力：『五属制御』<sup>ハレメンタルハンド</sup>『ニコボ』『撫でボ』

『炎』<sup>メンタルハンド</sup>『電』『氷』『プラス』『水』と『風』の変換資質を持つ能力五属制御。

さらには恋愛系洗脳能力であるニコボや撫でボ。

そして魔力値SSSにイケメンと言つ、ある意味テンプレな少年。知りたくも無いが、彼については結構行方は知っていた。

かなりの下種野郎であることを。

「…………」

そんな彼に行方は、原作主人公達を売ったのだ。<sup>なのは</sup>

自分は介入するつもりは無いから、彼女をどうにしても別に構わない、と。

つまり、中島を下種だとしたら、行方は外道なのだ。

これが物語であつたら、凄いアンチが来そうだな、などと行方は適当なことを考えたり。

「ふむ。だが……さすがに予想外だつたな」

中島が転入する事をまったく考えていなかつた。  
いや、考えられなくもなかつたはずなのだが……それは無いかな、  
と無意識のうちに思考停止してしまつていたのだ。

「ま、気にすることは無いか」

予想できなかつた　だからなんだ？

百戦錬磨の最高の魔導師スペルマスターが、力だけの肩に負けるわけがない。高慢しづらうとではなく傲慢おほまんでもなく、単なる実体験。

例え最強の魔導師が百人現れようと、彼は勝てる自身がある。  
そしてそれだけの魔力・技術・経験・能力を保持している。

別に予想する意味が無い事を悔いても意味が無い。  
だからあつさりと考える事を変える。やはり考える内容は、浮鳴遙  
に關して。

『マスター』

「ん？ 何だ。ニル

唐突に彼のデバイスが話しかけてきた。

『遙さんの能力は何なのでしょうか？』

「……あれ。言つていなかつたっけ？」

『はい』

自身のデバイスに言つていなかつたことに違和感を覚えながら、彼  
女の能力を説明する。

「浮鳴の能力は スキルを作るスキルだ」

『スキルを作るスキル……それはつまり、神様のような能力では?』  
「まあ、才能を作る能力とも言えるしな。名付けるなら、『想造力』スキルメイカーか?』

想つただけで力を創造する能力、スキルメイカー想造力。

「アイツの能力はそれこそ反則級だ。だからアイツの能力値ステータスの中で魔法系数値がかなり低かったんだよ」

浮鳴遙はその能力が強力な分、魔法に関しての能力値がかなり低い。魔力値はB以上は上がらないだろう。そう行方は予測している。使える魔法も少ない。例え行方が干渉したとしても、そこまで変わることはないと考えている。

「もつとも、魔法だけが弱点じゃないけどな

『と、言うと?』

「製造時間も必要だし、スキルによつては環境や時間、題名や条件などが必要になつてくるしな」

全能な能力、と言つわけではないのだ。

「オレがアイツを勧誘する理由は、そんな強力な能力を持つているからだよ」

『まあ、確かに彼女の能力は凄いですが……』

「そう。確かに一つの能力は凄い。凄いからこそ オレは警戒する

『…………』

「まるで、核爆弾かのようなほどの存在だろ? アイツ

能力が目当てで彼女を欲しているのではない。

彼女が爆弾のようなほど、何が起こるかわからない存在だから監視

下に置こうとしているのだ。

馬鹿な人間に取られたり、嵌められたりして強力な能力を渡してしまう危険性だつてあるのだ。

『ですが、遙さんは至つて理知的です。彼女がそつそつ騙されることは無いと思うんですけど?』

「洗脳とかあるんだぜ?」

『その時はマスターが解けば良いのでは?』

「隨時オレが近くに居るわけでもないし、そもそもオレを含めた転生者達は全員　『万華鏡写輪眼』の【神魂命】<sup>カミムスビ</sup>によつて強力な幻術を掛けられているしな」

『.....』

とある転生者が持つ瞳術【神魂命】<sup>カミムスビ</sup>の前では転生者であろうが、最高であろうが、最強であろうが.....誰にも勝つことが出来ない。

いや、勝つとかそんな話ではない。

「唯一、アイツはオレの敵ではないことは確かだが」

『そうですね。そもそも、原作知識が無い方でしたし』

「前世が前世だ。そもそも【リリカルなのは】すらない無い世界から来たんだから」

さすがの行方も、何が何だかわからなくなるような世界であった。

もつとも、この世界はすでに行方が知っている【魔法少女リリカルなのは】の世界ではない事だけは確かであったが。

『助けて』

「……やつらに限れば、もつ原作開始なのよね。忘れていたわ」

そして、原作が始まる。

あらゆる不安要素を含んで。

## 六話 彼の原作直前……彼女の能力（後書き）

名前：浮鳴遙（うきなる はるか）

性別：女

魔力：Bランク

能力：想造力

無効脳：スキルを無効化するスキル。作中では行方に使用。

アリバイブロック

脇罪証明：どんな場所にも居ることが出来るスキル。作中では行

方の目の前で使用。

ライアーカット

事実口異：眞実以外の言葉を除外するスキル。作中ではキールに

使用。

## 七話 彼女は白いウサギ

原作が始まった。

そのことに關して遙は、ただ事實を受け止めただけであった。  
考えていることは、出来るだけ巻き込まれないようにして、と言  
う逃げの思考であった。

そのための能力。戦闘にあまりにも特化していない能力を神から貰  
い、そして転生してきたのだ。

何が第一の人生を手に入れてまで痛い思いをしなくてはいけないん  
だ。

二次創作とか出てくるオリ主達の思考が理解できない。

運命を変えて幸せな未来にする？

馬鹿馬鹿しい。中一病ヒーローハンマーはさつさと卒業ハラダする。

結局やつていることは他人を救う事ではなく、自身の自己満足だ。

そんな愚痴を口から漏らさず、内心で吐きながら今後のことを考え  
る。

どこにでも行ける、居れる腑罪證明アリバイブロックに、どんな能力でも無力化でき  
る無効脛ライフゼロ、あらゆる病氣を操り応用で傷さえも治すライフケースことさえ出来る  
一本の病爪、相手の視界と同じ光景を見ることが出来、相手の考え  
ていることがわかる欲視力バラサイトシーリング、相手の言つた真実以外を除外できる事ラ  
イアーカットラ 実口異。

あらゆる能力を創造し、例え巻き込まれてもすぐに脱せられるよう  
手札を用意してきた。

巻き込まれないようにするのも大切だが、巻き込まれた場合どれだ  
け早く脱せるかも考えなくてはいけないのだ。

それほど十分に手札を持ち、さあ原作に巻き込まれないよつ今日は早く帰り、コーカーの念話が来ないよつ結界を張つてから一日を終えよ。

そう考えていたのに

「…………

親からお遣いを頼まれ、外に出ていた遙は偶然にも、原作に出ていなかつたジューエルシードを拾つてしまつた。

拾つた瞬間、しまつたと気づき捨てよつかと思つたが、もしかしたらいつか暴走して遙自身が危ない目に遭うかも知れない、と考え明日の朝にでも主人公の机の中に入れておこう、と決めたのだ。

そして、帰宅しようとしていた道で ウサギと出会つた。

「…………」

真つ白い毛並みを持つ真つ赤な瞳のウサギが、彼女の目の前に現れたのだ。

そして彼女の目を数秒ほど見つめたほど、ビコカへ飛び跳ねていつてしまつた。

「こんな街中で、うわわわと会つとは」

原作にはウサギなんて出てこなかつたので、これはリリカルとは関係ないだろうと決め付け帰路に戻つた。しかし、歩いているうちに気がついた。

人が居ない。

「…………」

ウサギと出会つた辺りから人を見かけなくなつた。  
もうすぐ夜だが、それでもまだ太陽は橙色である。つまりいつもなら街の人達が居る時間なのだ。  
なのに、居ない。

「…………封時結界？」

術者が許可した者や、結界に進入できるもの以外との空間位相をずらす魔法。

それをいつの間にか喰らつっていた。

「…………」

これを行つた人物の候補として行方が頭に浮かんだが、決め付けはしなかつた。

他の転生者が、自分がジュエルシードを手に入れた事を見たのかもしないし、もしかしたらフェイト達が現れたのかもしれない。  
前者なら全速力で逃げるが、後者ならジュエルシードを渡してしまおう。

そう考へ、少しの間待つていたのだが……

「…………誰も現れないわね」

異常なほどに静かな世界と化している。

待つのが面倒臭くなつたので、結界の終点を田指して歩き始める。もしかしたら誰かが見張つているかもしれないのに、能力を使用せず歩き始める。

そして数分後。

「駄目ね」

まっすぐ歩いてみたものの、結界の壁にすり当たる事はなかつた。結界を視認することは出来ているが、どうにも辿りつく感じがしない。

遠近法とかそんなものではなく……もつと違うものを感じる。

「…………」

風景に違和感を感じたので、買い物袋から卵を一つ取り出しつて落としてみる。

置いたのではなく落としたので、当然割れた。

それを見届けてから、彼女はまっすぐ歩き始めた。

「…………」

そして数分経つたが、卵が割れた地点に戻つてしまつていた。

「なるほど。そつまつ類のものね

術者は対象者の前に現れず、対象者の精神や体力を消費させていく。そう言う類の術だと考察した。

普通の道ならば【A - B - C】であるが、この術の効果により【A - B - A】となってしまっているのだ。永遠と終わる事のない道筋。

「だけど、私には通じないわ」

自身が持つ脳罪証明<sup>アリバイブロック</sup>により、結界の中であろうとなんであろうと、どんな場所に行ける。つまり永遠と終わらない空間からもあっせりと抜け出せるのだが

「……あ、あれ？」

脳罪証明<sup>アリバイブロック</sup>が発動しなかつた。

そのことにより、初めて遙は動搖した。本当の意味で出られなくなってしまったのだ。

「…………」

すでにこれが原作とは関係ないことに気づいている。

しかし、相手がどんな能力を使っているかわからないのだ。

結界と彼女の能力を無力化している能力は、また別物なのであるう事を推測している。

結界の所為で人々が居なくなり、予測であるが……幻術系の力により永遠の道を作られており、そして何かの能力で無力化されている。

「…………」

何故、自分がこんなことに巻き込まれているか考える。

転生者だから？ ジュエルシードを拾ったから？

こんなことなら、行方達と同盟を組んでおけば良かったと後悔する。最高の魔導師を自称する行方なら、少なくとも魔法の腕には自身が

あることが伺えるからである。

「やつれと出できなむことよ。何が目的なのよ」

しうがないので、正々堂々出でてきてもいいとした。  
幻術使い相手に正々堂々も無いかもしねないが。

しかし、相手は反応を示してくれた。

「…………」

建物の物陰から白いウサギが出てきた。  
一時間ほど前に見かけたウサギだ。

「…………え？」

だが、出てきたのはウサギだけじゃない。  
大きな満月が突如現れ、夜となつたのだ。

「ぐすくす」

しかもウサギがありえない笑い方をした。  
明らかに、使い魔だ。

「……出来れば、人型の姿になつてくれないかしら  
「別に良いけど、きっと貴方、驚くわよ」

ウサギが遙の目を見た瞬間、ウサギの姿が消えてしまった。  
そして 背後に気配。

「 初めまして」

背後を振り向く。

そこには、光の加減によつては紫色交じりにも見える白銀の長髪を腰まで伸ばした、赤き瞳を持つ少女が街灯の上に座り込んでいる。服装は女子高生が着る様なもので、ブレザー + ミニスカートである。そして、綺麗な髪の上からウサギの耳が生えている。

その姿を見て、遙は自身がすごい表情で驚愕していることに自覚しながらも、それでも驚かずにはいられなかつた。

「 鈴仙・優曇華院・イナバよ。鈴仙って呼びなさい?」

そして、危険だと思った。

## 七話 彼女は白いウサギ（後書き）

この小説ではリジエティカ・エイルツスを出すつもりはありません。  
いつか出す作品で出すつもりです。

## 八話 彼女の原作介入

「はあ……はあ……」

遙は屈みながら、乱れた息を整えていた。

髪の毛も乱れていたがそちらに集中がいかず、そのままの状態で移動を始めた。

その代わりにポーティルのためのゴムを解き、ストレートにする。顔見知りに自身の姿を特定されたくないために家でしか外さないゴムを外したのだ。

「なんなのよ一体……」

すでに結界は解除されており、ウサギの使い魔は目の前から居なくなっていた。

そして、遙が拾ったジュエルシードも、無くなっていた。

言つてしまえば、奪われてしまったのだ。

「…………」

敵は幻術使い。

いつの間にか奪われ、いつの間にか目の前から消えていて、いつの間にか結界が無くなっていた。

彼女が長時間結界を維持してまですぐに奪わなかつた理由はわからない。

推測だが、能力が使えないかどうかの確認をするまで現れるつもりが無かつたのである。

だが、遙が能力による脱出を図ったが失敗したのを視認して、前に現れたのだろう。

そして奪われ結界が解かれた後に、遙は全速力でその場から逃げた。文字通り逃げた。能力とか考えられず、逃げた。

相手は使い魔。

戦闘はもちろん出来るだろうし、幻術を見抜く能力だつて思いつかない。

遙の想像力<sup>スキンルメイカ</sup>は何の能力でも作れるわけではない。

規定・空間・場合など、色々な規則を以て能力を作ることが出来る。

逆に言つと、条件外のものになると能力を製作できない。

そして、幻術と遙の相性は悪かつた。

ただそれだけのことだ。故に、幻術対策がまったく出来ないのだ。

「あ～あ。嫌になるわね……」

空は本当に暗くなっていた。

幻の夜空ではなく、本当の夜空。

溜息を吐きながら、彼女は家路に戻る。

この時、能力を使って帰らなかつたのが仇となつた。

「……え？」

曲がり角の向こう側で思わず見てしまった光景。

そして、少女と目が合つてしまつた。

高町なのほど、目が合つてしまつた。

「はる、かちやん？」

「」

彼女は金色の毛のフェレットを抱きかかえており、その視線の先には黒い『何か』が存在していた。

最悪だ、と思わず呟いてしまつたが、その声音は『何か』の叫び声によつてかき消されてしまつた。

そして『何か』は飛び跳ね、なのはを踏み潰そうとする。

「わっ……！」

しかし遙がすぐさま彼女の体を抱きかかえ、すぐに脇罪証明を行い少し離れた場所に移動した。

その現象になのはとフェレットは驚いていたが、遙はなのはを降ろし、

「驚いていないで。今はこの状況をどうするかだけ考えて

と言つと、思い出したかのように『何か』を一人と一匹は見た。そして、フェレットが遙を見つめ質問してきた。

「貴方は魔導師ですか？」

「……一応ね」

「だったら、これを使ってアレを封印してください」

フェレットはどこから取り出したのか、赤い宝石を見せてきた。それをほんの少し見つめた後、

「無理ね」

あつやつと否定した。

「え……」

「私は半人前どころか三流よりもとしたのレベルよ。それも戦闘向きじやないし、才能も無いわ」

「で、でも……」

「むしろ、彼女の方が適材じやないのかしら?..」

遥がなのはを見ると、それを応用にフュレットもなのはを見た。いきなり自分が上げられた事に少し驚いた。

「え……私!?」

「そうよ。見たところ、私以上の魔力量あるし」

「ど、どのくらい……?」

「私が十円だとしたら、貴方は五百五十円ほどの価値はあるわ

「ど、どのくらいかわかり辛いかも……」

「あ、あの……その方は魔法とは……」

「関係ないわね」

『ユーノ様』

と、そこで赤い宝石が反応した。

「わ、しゃべった」

『そこ』の遥様よりも、彼女との方が適合率が高いと思われます』  
『れ、レイジングハートまで……』

フェレット……もとい、ユーノは赤い宝石の発言に表情を険しくしながらもどうするか考えていた瞬間

デバイス

「なのは、平氣か！」

上空から大量の魔力弾が降ってきて、『何か』に攻撃していく。銀色の光を放つ、火の弾や風の弾、水の弾や氷の弾に雷の弾である。そして現れたのは 中島貴樹である。

「貴樹君！？」

「えつと……彼は誰でしょうか？」

「クラスメイトよ。もつとも、彼も高ランク魔力量の魔導師だけど」  
その言葉に驚くユーノ。  
この世界は魔法技術が無い世界のはずだ、と考えるが今はそれよりも、

「なのは！ 悪いが俺は封印魔法を持つていらないんだ。だからお前がアイツを封印してくれないか！？」

「わ、私が……？」

「ああ！」

勝手に進んでいくが、遙は気にしない。  
後はテンプレ通りに終わるであろうと思つたからだ。

その後、なのはは貴樹に頼られたためか、嬉しそうにレイジングハートを起動させ、そして『何か』を封印した。  
そのままじきにユーノは呆然としていたが、遙自身は今後何を話せば良いのか、内容を考え始めていた。

中島貴樹が介入する事を前提として、自分がどうすれば原作にこれ以上介入関わらないように出来るか、頭の中で構築し始める。



## 八話 彼女の原作介入（後書き）

今日は雑でした。あと、~~が~~ががが。  
実はと云うと、今日は投稿するつもりがありませんでしたが……  
応思い浮かんだので投稿。結果、雑になってしましました。

すみません。

P・S

作者はポニー・テイル萌えです。  
異論は認める。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4580z/>

魔法少女リリカルなのは ~転生者によるIFな物語~

2011年12月20日21時54分発行